

成尋阿闍梨母日記の研究
基礎篇

岡崎和夫著

序 言

この作品は、遅く平安朝時代後期、八十路なかばにたちいたる長寿に恵まれた母が、高僧となったその子息の入宋というできごとにめぐりあわせて、驚き、とまどい果て、その別離を深く嘆き悲しんで書きつづった手記である。子息の名は成尋、往時、洛北天台宗の名刹岩倉（石蔵）紫雲山大雲寺の阿闍梨であった。あるばあいは家集、あるいは家集的な日記、また日記的な家集などとしてされるが、その実質は、ふるく佐佐木信綱博士、またちかく宮崎莊平博士など優れた先蹤の知見にしたがって王朝女流日記作品のひとつとすべきものとみとめられる。

小書は、この作品の研究のこれまでをふりかえりながら、はじめにこの作品について簡潔な解説をこころみ（↓「解説篇」）、ついでその古鈔伝本文を掲げて、その全釈文を付し（↓「本文篇」）、さらに本文再建に直接かわることに重要な課題についての研究・探求のありかたの基底を論じ（論考篇）、もって『成尋阿闍梨母日記の研究 基礎篇』としたものである。

なお、本書におさめた影印本文は江戸時代初期ごろの書写とされる御所本、すなわち宮内庁書陵部蔵成尋阿闍梨母集（二卷一冊）の本文である。ただし、いくつかの制約から原本（列帖装、縦一九榧、横一六・八榧）を約七割ほどに縮小してかかげた。

また、比較のために、その直接の親本かとされる冷泉家旧藏本文のかかわりある条を角川書店『貴重古典籍叢刊別巻一、重文成尋阿闍梨母集』複製本によって脚注の位置にしめた。また、頭注の位置には、これと分けて、両伝本ともに本文の一致をみせながらそれをそのままに成尋母自筆原本のかたちであったとはみとめがたい条についてふれた。ただし、漢字・仮名による表記のとなり、加筆修訂によって同一本文の達成されている条、また助動詞「む」と「ん」のとなりなどについては原則としてとりあげなかった。これらふたつの類の検証によって、この作品の本文研究の直接の基盤も確認され、また、両伝本の書写者の書写にかかわる姿勢（態度）のこともおのずから認定されようとおもう。またそうしたたしかめのうえに、この作品の本文再建がこのふたつの伝本の特徴をそこなわないかたちに達せられてゆかなければならないことも知られようとおもう。

なお、この書の刊行について宮内庁書陵部当局の格別のおはかりをいただいた。深く謝意を表したい。

二〇一二年五月一日

著者識

目次

解説篇	一
成尋阿闍梨母日記 解説・補説	三
本文篇	一九
御所本成尋阿闍梨母集 影印本文	三
原典批判・成尋阿闍梨母集 再建本文	一五七
（出典…再建本文は、岡崎和夫著『成尋阿闍梨母日記の研究 再建本文・索引篇』（明治書院・一九九五年六月）をもとに、あらたな知見と増補を加えたものである。）	
論考篇	三三
本文再建論 第一章・第二章 本文再建のために	三五
本文再建論 第一章・表出構造論からのちかづき	三六
本文再建論 第二章・日本語史学の知見からのちかづき	三五
本文研究関連主要業績一覧	二八三
和歌一覧	二六七



大雲寺入口標

みぎ「岩倉観音 大雲寺」、ひだり「大雲寺の文学史蹟」。この「史蹟」識は、

○源氏物語の作者紫式部は幼少の頃からしばしば大雲寺を訪れ「若紫の巻」の中で光源氏が祈禱を受けに来た北山の某寺とは大雲寺のこと、若紫と出会う場面はこの附近を舞台として描写したものである。



○当時の成尋は入宋の志を立て五年間不臥の行を修し延久四年（一〇七二）八四歳の老母と浄土での再会を約して中国へ渡った子を思う真情を和歌に託した成尋阿闍梨母集は此所でつくられたものである。
○井原西鶴の「好色一代女」の主人公が当寺に参詣する場面は有名であると誌している。

大雲寺は現在かつての伽藍があったとおもわれるかたすみにこぢんまりと本堂、新羅明神仮宮、放生池、墓地などを配置しているが、隣接の「石座神社」「岩倉陵（冷泉天皇皇后昌子内親王陵）」、また医療法人三幸会敷地などにつづく紫雲山下の台地をあるいてみると、昔日のおもかげのほうふつする遺構がいくつかみとめられる。